星・日両国に共通する高等教育事情と課題

国土が狭く資源が少ないシンガポールでは、人だけが資源という考えが強く、教育に大変力を入れています。しかし大学は National University of Singapore（NUS）とNanyang Technological University（NTU）の2校しかなく（近々Singapore Management University という私立大学が開校するようですが）、筆者が会った金融関係者は、ほとんどNUSの出身者でした。一方、裕福な家庭の子弟やNUSへの入学が叶わなかった進学希望者の多くが英国や米国の大学に留学しています。実際、筆者の友人であるシンガポール人の銀行員の場合、男兄弟3人全員が英国の大学に留学していました。いずれにせよ大卒者の絶対数が少ないため、ほぼ確実に比較的高い社会的地位を得ています。

当地で大学に入学するためには、小学生時代から非常に激しい競争を勝ち抜くことが求められます。即ち、各段階における選別テストによってクラス分けが行われ、高いスコアを取り続けなければ、進学の道が断たれる制度となっています。一般的に先進国では幅広いレベルで多数の大学があり、大学で学ぶ機会は広く与えられていますが、当地では選択の余地はありません。しかし、このような競争の中で懸命に、子供たちが勉強しているということが、当国全体の教育水準を高め、経済発展の原動力になってきたのも事実です。

不幸なことに物事には功罪が付きまとうもので、小さい頃から真面目に決められたことをまんべんなくこなすことが強いられるため、シンガポールの大卒者は社会的な経験を多く積んでいる欧米の大卒者と比較して面白味のない、ややガリ勉タイプが多いとの意見を聞くことがあります（NUS出身者は異論があるようですが…）。シンガポール政府は、「天才はいらない。平均的にレベルの高い人材が育てばよい」との方針を持っており、それがシンガポール社会の“退屈さ”につながっている面もあるでしょう。

このような事情は、我が国にも共通するものがあり、創造性を育てるより平均点の高い人間を育てがちです。国土と資源に乏しいという両国共通の条件の下、高い教育水準を達成することで、経済発展を成し遂げましたが、成長に翳りが見え始めている点も共通しているといえます。両国が今後も繁栄していくためには、過去の成功体験に縛られず、新しい教育のあり方を模索していく必要がありそうです。

冨田 賢